

---

# 出会いは螺旋のように

榎 七月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

出会いは螺旋のよう

### 【Zコード】

Z5488V

### 【作者名】

檻七月

### 【あらすじ】

超能力者たちが、必然のように出会つ。

その出会いは始まりで、過去、未来にも重要な出会いはあった。

どこで出会つたのか。どこで出会うのか。

交錯する人の繋がりの中、最後に知るのは幸せだった。

「一緒に暮らさない?」

それは甘い誘惑だつた。中学生では実現不可能だけど、それが出来たら幸せだつた。

隣のクラスの男子、速水零はやみれいは薄い笑みを浮かべて手を伸ばした。

「もちろんすぐには無理だけど。男女が暮らすつていうのも問題だしね。でも、いつかは」

零との間に恋愛感情はない。そんなものではない、特別な仲間意識があつた。

初めて出会つた、超能力を持つ仲間。運命のようだし、感応系の能力を持つ仲間だつた。

彼に出逢えて良かつた。それだけで救われた。

「僕の未来に君はいる?」

「いるよ。あなたの隣に私はいる。あと一人、近くにいる」

零の手に触れて『見えた』のは、私が居る未来だつた。他にも一人、一緒にいた。

未来予知。生きている対象物に触ることで、その物の未来が見える。見えないようくに制御も出来るが、それは完全ではない。見たくなくても、頭の中に入つてくることがあつた。強い感情を伴つた未来は、触れなくても見えることがある。

その能力は私を苦しめた。悪い結果を予知しても、変えられないことが多い。警告しても怪しまれるだけだつた。そして、予知通りのことが起こると、私に非難の矛先が向かつた。予知を『呪い』だと言われたこともある。百パーセント当たる予言は、恐怖の対象だつた。

反対に、予知を悪用されそうになつたこともあつた。株や競馬の予想、政治家の動向などに利用されそうになつた。しかし、私の対象は『生きているもの』に限られたため、实际上手くいつた試しは

ない。『馬』や『政治家』に触れない限り、予知はできない。その『条件』を知られないように、細心の注意を払っていた。

そんなことがあったからこそ、今まで能力を隠してきた。悪い予知は相手にさりげなく警告し、自分で出来る範囲で危険を回避させる。

それは自己満足だと、わかつていた。

「君は優しすぎるからね。だからこそ、人を救える。僕も救われた」「私も救われた。あなたの『過去透視』が、私を見つけてくれた」

『過去が見える』零も、その能力に苦しんだに違いない。過去は変えられないから、私よりも辛いだろう。

でも、『過去が見える』からこそ、出逢えた。私の過去に『未来予知』があつたから、零は私に声をかけた。

私と反対の能力。私と対になる能力。

「あなたといる未来のために。いつか、きっと。一緒に暮らせるよね」

「遠くない未来に」

私の予知は一年以内に起こる未来だった。一年以内。高校一年生の秋までに、他の一人と出逢つて一緒にいる。

高校生になつたら家を出るのは簡単だと、予知しなくともわかつていた。私のことを、両親は気味悪がつてゐる。不吉なことを言う子だと、いち早く気付いたのは近くにいた両親だつた。ただ、それが『未来予知』という能力であることは知らない。普通じやない、とわかつてゐるだけだけど、それは真実だ。

最近になつて、母の弟夫婦の養子になる話が出ていた。叔父夫婦には子供がない。両親も、私を手放せるならと、『私の変なところ』のことは話していない。叔父さん達も、私のことはただの聴い子、と思つてゐる。

実親から養親に変わつても、未来は変わらない。

私も、これ以上家族を苦しめたくなかった。お金を援助してくれるなら、誰でもいい。

「一緒に暮らそう

繰り返した零の言葉に、手を強く握り締めて頷いた。

中学三年の秋。未来の繋がる約束をした。

「唯ちゃんの能力つて別に悪くないと思つけどなー」

両手で湯呑みを持ち、緑茶が冷めるのを待つている柴田さんが、ポツリと呟いた。その姿と感想に、笑みが漏れた。

その感想は、悪いことを考へない人のものだつた。簡単に人のせいにしない人だから言えることだ。悪い予知を私のせいにしないで、その回避を自分でしようとする人。自分の行動に責任を持てる人。疑うより、まず信じる人。

柴田さんは、そんな人だつた。

「未来は見たくない結果や、なりたくない自分になつている姿を、過去は振り返りたくないもの、隠しておきたいものを知られることになるからね。どつちも嫌だと思われるだろうね」

呉さんの意見は的確だつた。そう思われることが多かつたからこそ、力を隠している。

呉秀さんと柴田耕平さん。ある事件をきっかけに出逢つた刑事さんだつた。私と零の能力を知りながらも、利用しようとはしない。未解決になりそうになつたり、無差別な連續的犯行の場合は、力を使って手助けしたりすることもあるけど、それは自分から申し出たときにつつた。呉さんたちは、私たちに力を任せたりしなかつた。出逢つてから一年経つた今、それは変わつていな。

そんな付き合いは純粹な私的交友で、家に招くほどの親密さがあつた。

何故か話の流れで、私と零が一緒に住むことになつた経緯を話していく、今に至る。

「占いは、予知に似てませんか?」

「確率の問題だよ。絶対当たる占いは、占いじゃなくて予知なんだ。占いは可能性で、予知は確定つてこと」

呉さんの説明に、柴田さんは「なるほど」と頷いた。

わかりやすい説明だ。私の力は、『確定』だから忌み嫌われる。『可能性』のような曖昧さはなく、『このままだと確実に悪い結果になる』と示されるのは『呪い』に近いのかもしれない。

たとえ、見たくないものを先延ばしにしているだけだとしても。でも、ることによって回避できるんですね？ 良い力だと思うんですけど」

「ありがとうございます。今は零たちがいるからそう思えますけど、制御できなかつたときは大変でした」

「それは私もよ」

幼い声が同意した。源怜香、八歳。見た目は普通の小学二年生だけど、精神年齢は高校生並だつた。彼女をそうさせたのは、彼女の能力で。精神感応能力、通称テレパスが、怜香を普通の八歳にさせなかつた。

物心がついたときから、怜香の周りには人の本音が溢れていて、大半は悪意だつたという。その能力は自分が持つているものと知つたときには、周りから気味が悪いと言われていた。

私もそうだつたけど、怜香は比較できないほど傷ついている。言葉ではなく、心の声によつて。

「人の心が読めるから、人を信じられなかつた。周りは嘘ばっかりだつたわ。親でさえもね。でも、唯がいたから。今は制御もできるし、この能力は悪くないつて思える」

怜香が笑顔でいられて良かつた。私がいたから救われた、という言葉は私を救つた。少しでも怜香に幸せになつてほしいから、私の予知で導いてあげたいと思つてゐる。

みんなが幸せになれる道はきっとあると信じてる。  
「で、話の続きだけど、亮<sup>あきら</sup>とはいつ出逢つたの？」

「五月の連休明けに、零が家に連れてきたの」

高校一年の秋。夏から零と同居することになり、やつと新生活に慣れてきたころ、零は『友達』を連れて帰つてきた。

「初めまして、 麻生亮です」

目の前で爽やかに笑う顔は、 見たことのあるものだつた。

零の未来で見えた、『他の二人』にこの顔があつて。

あのとき、私は彼の名前を呼んでいた。

「亮…」

思わず漏れた声にハッとした。 初対面で呼び捨てなんて、 最悪だ。 不快に思つていなかつたが恐る恐る亮を見ると、 亮は楽しそうに笑つた。

「これからよろしく、 唯」

差し出された手を握るのに迷いはなかつた。

大丈夫。 力を制御している間は何も見えない。

「僕の力はサイコキネシス。 モノを動かすというより、 モノにかかつている力を変えられるつて言つ方が正確かな。 君の力も教えてくれる？」

零は、 私の力を話していなかつた。 だから、 亮は気軽に握手を求めたのかもしれない。 手が触れて未来が見えると知つたら、 亮はどうするだろうか。

零を通して見た亮は笑つていた。 あの未来は、 変わらない。

「私の力は未来予知。 生きているモノに触ると、 未来が見えるの」

亮は、 握手をした方の手を握つたり開いたりした。

「じゃあ、 僕の未来も見えた？」

「見なかつた。 制御したから」

「この家で、 僕が住んでいるか見てほしかつたな」

あつさりと言われた言葉は重く、 すぐには理解できなかつた。

亮はなんて言つたのか。 亮は零の友達で、 サイコキネシスの持ち主だつた。 亮のことは零の未来で見ていた。 私と亮は笑つていた。 その場所は。

「この家だ…」

「え、 何？」

亮の問いに、 首を横に振つた。 零の未来は、 今があるからこそ現実となるもので。 今行動しないと始まらない。 横で見ている零が楽

しそうに口元を緩めているから。

私が、あの言葉を語つ。

「零の未来に、私とあなたがいた。この家で、笑っていたの。だから、今あなたの未来を見ると、その光景があると思う」「確かめる？」

「それを、現実にするために」

喉が乾いた。一息吸つて、声と共に吐き出す。

「一緒に暮らさない？」

「口説かれちゃったわけだ」

呉さんのからかいに、亮は「そうなんです」と返した。口説いたつて。そうなのかもしないけど、そう言われると欣然としない。

「別に、零が言つても良かつたんだけど?」

「唯が言つてくれて良かつたよ。零からは、唯の許可があつたら住んでいいて言われてたから」

初耳だった。驚いていると、柴田さんが「そういえば」と疑問を口にした。

「零くんと唯ちゃんが一緒に住むことになつた理由は? 超能力仲間だけが理由じやないよね?」

そう言えれば言つていなかつた。当たり前すぎて、言つのを忘れていた。

過去と未来。相違点は。

「零は私の力を打ち消せるんです。制御が上手くいかないとき、零の力が抑えてくれるんです」

「なるほど。一緒にいると楽になるんだね」

「耕、少しば考えようね」

柴田さんは呉さんに苦笑されて拗ねた。

素直な人だと思う。柴田さんの質問は頭の良い人の質問だから、不快じやない。言い忘れていた私が悪い。みんなが同じ前提で話しているわけじやないのだから。

「亮くんは感應系じやないよね?」

「はい。僕は超能力仲間として、一緒にいたいと思つたんです。同じ超能力を持つ者なのに、感應系は辛すぎるから。僕にできる」上で支えたいと思つたんです」

何度も亮に確かめたときに聞いたものと同じだった。感應系はプライバシーを破る。それでも一緒に居ることを選んでくれるのが不

思議だつた。見られたくない、隠したいものを暴いてしまつのに。  
一方的な侵害なのに。

それでも亮は笑つていた。

「怜香のテレパスは、読まれるより読む方が辛いし。それにまだ八歳だから」

人の心が読め、ずっと人の本音を聞いてきた怜香。その辛さは想像できない。想像できたとしても、想像以上の辛さだと思う。人が傷つくるを見るのより、人の惡意を見る方が辛い。

「怜香のことは予知できなかつたんです。『私が出逢つた』から」「そつか。自分のことは予知できないんだつたね」

柴田さんに頷いた。

私の予知は『生きているものに触れる』ことで可能になる。だから、自分の未来だけは見えなかつた。

「あのときは、唯だけが信じられた」

あのとき。怜香が私に出逢う前のことを『過去』にてきて良かつた。出逢つたときの怜香はまだ六歳で、六歳なのにそうは見えなかつた。

心を閉ざしていた。

ヒステリックな甲高い声に、幼い声が冷静に応えた。声の方を見ると、近くの中学校の制服を着た少女と幼女が喧嘩しているようだつた。中学生が一方的に怒つているように見える。

その光景に違和感を覚えた。それは、五歳の言葉遣いと態度だつた。

「私が盗んだつていう証拠はあるの！？」

「鞄の中には、『新品のアイライナーとマスカラ』が何かを写し取つたような台詞に、少女は怯えた。

あからさまな変化に、思わず歩み寄つた。嫌な予感がする。

「なんでアンタが…気持ち悪い！ 化け物！」

少女は鞄を投げつけようとした。教科書が詰まっていると予想される鞄。それが当たればどうなるかなんて、予知しなくともわかる。鞄から手が離れる前に腕を掴んだ。

「投げちゃダメ」

「でも、この子…なんなの！？ 普通じゃない！ 化け物！」

腕を振り払つて少女は走つて逃げた。

化け物。それは何度も言われたことのある言葉だった。未来がわからることは恐怖で、恐怖で、異常なことで。

似ている、と思った。

「大丈夫？ 怪我はない？」

しゃがんで幼女と視線を合わせた。

金色がかつた色素の薄い、緩くウェーブのかかつた肩までの髪と、茶色が強い瞳が印象的だった。

あやすように頭に手を延ばすと、幼女はビクッと肩を震わせた。

「大丈夫よ。私はあなたの味方だから」頭に手を乗せた。

確信があった。

化粧品名を言つたことと、それに対する少女の異様な怯え方は、見たことがあるものだつた。

この子は超能力者だ。それも感應系。零のような過去透視か、心を読む読心か。化粧品名を言つたから、後者か。  
(ねえ、私の声が聞こえているでしょ？)  
「…あなたも心が読めるの？」

「お母さんは一緒じゃないの？」

(声に出しちゃ駄目。ここでは、誰が聞いているかわからないから。私は心は読めない。予知能力者。)

「お母さんは家にいるわ」

「じゃあ、送るね」

「Jくん、と頷いた幼女に笑みを浮かべた。この子は能力の危険性

を理解している。

感応系の能力は負担がかかるから、と距離を取ろうと頭から手を離したが、幼女はその手を取った。彼女が望むなら。そのまま手を繋いで公園を出た。周囲からは、姉妹にでも見えているだろ？

無言で歩いて五分。人通りのない道に差し掛かり、深く息を吐いた。

「私は不知火唯、十六歳。予知能力者だよ」

「私は源怜香、六歳。読心、テレパスよ」

まるで同じ年の子と話しているみたいだ。声は幼いが、話し方はしつかりしているし、応答も速い。

「ずっと大人たちの心の声を聴いてきたから」

怜香は、心の声に応えた。

そうだ。考えていることは怜香に伝わる。私に関することは、考えてはいけない。

私の過去は、怜香を傷つける。

「あなたの能力使用条件は何？」

「触ること」

同じだ。私も触れることで、予知ができる。触れなくても、近くで起こる生死に関わる事故を予知することができる。

「私もよ。強い感情は直接頭に流れ込んでくることがあるわ」

能力は零に似ている。零は、触らなくても自由に能力が使える。

「零？」

「一緒に住んでいる仲間。もう一人いるんだけどね」

『過去透視』の零と『重力操作』、『サイコキネシス』の亮。今、三人で暮らしている。みんな両親はいるけど、超能力者の仲間といふ。

「私も一緒に住みたいな…」

「両親はいるんでしょう？」

「いる。けど、私が怖いのよ。最初は平気なフリしてたけど、心の

中では怖がつてたわ。何で私たちの子供がこの子なんだろ？って。  
気持ち悪く思つてる」

握る手に力が入つた。似ている。けど、私より辛い。心が読める  
ところとは、本音を聞くこと。それは制御できなければ  
拷問だ。

小さい頃は、皆が自分と同じ力を持っていると思つていて。その  
力が特別だと気付いたときには遅くて。気持ち悪い、異常だ、と思  
れられていた。

考えちゃいけない、とわかっていても、私の過去が同調する。全  
然同じじゃないのに。同じであるはずがないのに。

思考を振り切るために手を放そうとしたが、怜香は強く握り返し  
た。

「放さないで。あなたの心の声を聴かせて。…唯と一緒にいたい  
…怜香が望むなら。私はあなたのために動く。私があなたの未来  
に見た『一緒に暮らしている私』を本物にするために」  
「私の未来に唯がいるの！？」

「今この段階ではね。その未来を迎えるためにはやるべきことがある  
から。だから、怜香。あなたはどうしたいか教えて？」

繋いでいた手を放して正面に立つた。向かい合わせで、視線を合  
わせる。身長の差なんて気にならなかつた。

「唯と一緒に暮らしたい」

「了解」

未来に向かう約束が、交わされた。

「確かに、唯ちゃんと怜香ちゃんは『従姉妹』って言つてたよね?」「はい。怜香の両親に了解を得て、私は怜香の母方の兄弟の子供、ということにしました」

高校生はまだ子供で、無力だった。両親の庇護がなければ生きていけない。怜香の望みを叶えるためには、嘘が必要だった。その願いの実現は、思つていたよりも簡単だった。事情を説明すると、怜香の両親は戸惑いながらも同居を許可した。

従姉妹という設定は、母親からの提案で。仕送りは少なくなく、怜香一人を養うには十分だった。

あのとき、怜香は両親の心の中に何を見たのだろう。

「私は迷わず唯を選んだ。だから、両親が私をどう思おうが関係ないわ。ただ…あの人たちの決断に、少しだけ迷いがあつたのは嬉しかつた」

どんなに疎んでいても、子供を思う親の気持ちはあつた。それは怜香の救いになつただろう。

私に干尋がいるように。

「私は『黒瀬』っていう名字だつたんです。『不知火』は母の旧姓で。母方の弟の養女になつたんですよ」

これは零しか知らない。亮にも怜香にも言つていなかつた。

この場だから言える。私の過去は、零がいたから『過去』にできた。

「母の弟、今の父は、私の力はただの勘だと思っているんです。母の考えすぎだ、と。父の前では未来のことを話すことはなかつたらだと思います。それで、子供が出来ない父と母に引き取られました」

中学の卒業式に養子になつた。卒業を祝つてくれたのは、今の両親だつた。

本当の私を知らない父と母。それで幸せだった。

「零と一緒に暮らすことは納得してもらつていました。本当の母が、その方が良いと説得しましたから。高校を卒業してから、大学に通う間は一緒に住もうと思つています。四年間だけなら、親子でいられると思いますから」

「四年も離れるの…？」

「四年だけ、だよ」

怜香の詰問に、零は冷静に答えた。別居することは黙つてなかつた。それは予定であり、未定だから。

「大学に進学せてもうつには、資金の負担は軽くしないといけない。

「その間、弟も一緒に住む予定なんです。高校に通うのに便利なので。弟、千尋は私の家族の唯一の味方ですから」

私の能力を受け入れてくれた千尋。未来は変えられる」とを教えてくれたのは千尋だった。

唯一の味方だった。千尋がいたから、私は家族を裏切らないでいられた。

「唯に弟がいたなんてねー」

「秘密にしてたわけじゃないよ。ただ、千尋のことを話すと、『黒瀬』の話をしないといけなくなるから」

まだ話すのに抵抗があつた。『黒瀬』は私を一番拒絶したから。

「えつと、唯ちゃんは『黒瀬唯』だつたつてことだよね？ もしかして、家は五月市？」

「そうですけど…」

柴田さんの様子がおかしかつた。嬉しそうな、泣きそうな、複雑な感情が混じつた表情だった。

出会つてから一年、柴田さんのこんな顔は見たことなかつた。

「唯ちゃん！ 君にお礼が言いたかつたんだよ！ 助けてくれてありがとう」

柴田さんは泣きそうに微笑んだ。

何がなんだかわからない。ただ、五月市にいた私を柴田さんは知つてのことだけはわかつた。

黒瀬唯。五月市では、不幸な予言をする子供で知られていた。

「零くん、僕の過去を見てくれないかな？ 今から話す内容が間違つていいのか、確認してほしいんだ」

「わかりました」

零は柴田さんの手を握つた。零の見る過去は真実で、脚色された記憶じやない。過去に実際起こつただけが、見える。思い出は、記憶はどこかで改竄されることがあるから、零が見れば真実がわかる。

柴田さんと私の過去。零には何が見えるのだろうか。

「僕が唯ちゃんに会つたのは、高校二年の春だつた」

私は小学一年だ。あの頃にはもう、予知の力は隠していた。でも、制御は上手くできなかつた。

「唯ちゃんと怜香ちゃんの出合いに似てるんだけどね。あのとき唯ちゃんは、苛められていた」

あのときとは、いつのことなのか。いつも苛められていた気がする。小学一年生は、無邪気に無自覚に人を傷つけた。

「見ていられなくてね。僕は唯ちゃんを助けた」

柴田さんらしい。見て見ぬ振りをしなかつた。それだけで、小学一年の私は嬉しかつただろう。油断してしまつくらいには。

「唯ちゃんは、突き飛ばされて膝を擦りむいていた。それで僕はハンカチを渡したんだ」

ハンカチを渡した。接触があつたということだ。

あのときの私なら、きっと。

「そのとき、ビクッて震えられて。あのときは傷に触れたかな、と思つたんだけど、今ならあれが予知だつたんだってわかるよ」

きっと予知したはずだ。上手く制御できない上に、優しさに油断していたなら。

私はそれで、何を見たんだろう。

「いきなり『次の信号を渡らないで！ あなたは車に轢かれる…』回だけ、青信号を渡らないで』って言われて。確かに気味が悪いと思つたよ。不吉なことをいう子だなって」

それは素直な感想だった。いきなり『車に轢かれる』と言われて良い気はしないだろう。

でも、そう言つことでしか、伝えられなかつた。

「それで、ハンカチを渡してその場から離れたんだ。それ以上居て、不審者に間違われても嫌だつたし」

ハンカチを渡してくれただけでも良かつた。その優しさは、私を救つたはずだ。

「『次の信号』は、待ち時間が長いことで有名でね。一回見逃すなんて嫌だつた。でも、負い目を感じて。僕は立ち止まつた」

私の見た未来は、一つのことで回避できる。柴田さんの場合は、

『次の信号を渡らない』ことだつたわけで。

「交差点に入通りはなくて、僕は一人で立つていた。青信号になつて一、二秒後だつたかな。信号無視した車が凄いスピードで目の前を走り抜けたんだ」

もし、道路を渡つていたら。その光景を私は見たはずだ。

だからこそ、優しくしてくれた柴田さんに忠告した。

「その車は、交差点で車と衝突した。死者は出なかつたけど、重体一名、重軽傷者が五名出た事故だつたよ」

「合つてます。柴田さんが見た過去と記憶に差違はなく、話したとおりですよ」

零はするりと手を放した。零は柴田さんが過去で見た事故を見たはずだ。

どんな悲惨な事故だつたのか。どんなに最悪で、死者が出るような事故や事件でも、零は表情を変えない。慣れではなく、経験上身に付いたものだつた。それは、私も怜香も同じだ。

「あのとき唯ちゃんが言ってくれなかつたら、僕は今ここにいなきよ。ずっとお礼が言いたかつたけど、見つからなかつたから。名前

はランドセルに『くろせゆい』って書いてあつたのを覚えていたんだ。だから今、ありがとう」  
柴田さんの笑顔に、泣きたくなつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5488v/>

---

出会いは螺旋のように

2011年8月19日03時34分発行